

ちよっと良い話

先般小生の勤務する会社で、マダーフード（母親の手料理）という題で随筆を募集しました、全国から多くの応募を戴き盛況のうちに終わりましたが、その中でこれと思うものがありましたのでご紹介します。

「ちゃぶ台の一皿」

あれは、父親の威厳というものが未だ家の中に存在する時代だった。公務員の父は毎晩同じ時間に帰宅した。父が帰る時間にはおつまみの一皿が上に置かれ、晩酌の用意が整っている。夕飯は父の晩酌の後、それが我が家の不文律であった。ある晩、無性に腹が空いた私と弟は、父の帰りを待ちきれず、ちゃぶ台の上のヒジキの煮付けを平らげてしまった。母の煮付けは私達の好物だった。父の叱責は兄の自分が甘んじて受けようと、私は悲壮な覚悟をした。外は、その冬一番の雪が降り始めた。帰宅して膳を一瞥した父は、母を一喝した。私が弁明しようとした時、普段おとなしい母が珍しく父と向き合った。「父さん、今日へそくりはたいてパーマかけたんよ。美人でしょうが、惚れ直した？酒の肴はぼた雪と私で充分でしょうが・・・」父は母の前に言葉を無くし、無言で晩酌を始めた。母は台所の勝手口から、こっそり私を豆腐屋に走らせた。暗い雪道、母のくれた小銭だけが手の平の中で暖かかった。ちょうど商いを終え暖簾をたたみ掛けた豆腐屋で、私は最後に残った木綿豆腐を手に入れることが出来た。急ぐ私の手の中で豆腐が揺れて、いびつに成った。母はそれをあっという間に湯豆腐ににして、薬味を添えてちゃぶ台の上に置いた。一箸含んだ父の背から急に声がした。「ひでかず 外は寒かったろう、ありがとよ」驚く私に父はお猪口を差し出した。六歳にしての、初めての晩酌の夜、お酒は苦かったけれど、普段無口な父の「ありがとよ」と母の湯豆腐が私の心を暖かくした。

と言う訳で人生で食べたことが大きな思い出に成っていると思います。私もはや還暦を過ぎ永い人生を踏まえてきましたが、思い起こせば、あの時の魚がどうだったとか、キャンプでのカレーライスがどうだったとか、多くの食べ物とその状況が思い浮かびます。恥ずかしなからご紹介しましょう。

漁船で食べた魚の煮付け

まだ小学生だったと思います。母方の親戚で沿岸漁師をやっている所へ夏休みになるとよく遊びにいきました。子供が女の子ばかりだったせいも、随分可愛がってくれた気がします。さざえや蛸を紀淡海峡で獲るのですが、昼飯のおかずは獲った魚や蛸で売り物に成らない物です。ゆれる小船の上で七輪で火を起し小さな鍋で醤油だけで煮るのですが、それから永い人生で、魚料理が出れば、必ずその味を思い出します。

キャンプで食べたカレーライス

結婚前の話です。今の女房と伊豆へキャンプに行った時の話です。出発前あれやこれや車に積み込み、勇んで出かけたのですが、急に雨となりそれも激しい雨足でとてもテント設営どころでは有りません。急遽近所のお寺さんに駆け込み理由を話して山門下にテントを張らして戴きました。勿論キャンプファイヤーどころか焚き火すら出来ません。唯一発売されたばかりの携帯ガスコンロを持っていたので、カレー位なら出来るだろうと造り始めました。相手はおぼつかない手つきで野菜を切り、剥き海老の缶詰で味を調えます。携帯コンロの火力は弱く、ジャガイモはほとんど生でした。でもその味ははっきり舌に残っています。あれ以来それ以上の美味しいカレーは食べたことは無いと思います。